



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 水と火の職人

くろくわしゅう おおのかじ
黒鋏衆と大野鍛冶

vol. 33 | 季刊 秋
2014





水と火の職人

くろくわしゅう おおの かじ
黒鋏衆と大野鍛冶



知多半島は江戸時代、海運を背景に、醸造業、窯業、木綿業など、大都市・江戸をターゲットにしたダイナミックな「ものづくり」を展開していました。杜氏、桶職人、陶工、絵付師、機織り職人、船大工…。そこには、実に多様な職人たちがいました。商品でなく技術を売り物にして他国に出て行った「水を制する職人・黒鋏衆」、そして「火で道具をつくる職人・大野鍛冶」に迫ります。



上左より 黒廻間池 (知多市) 黒鋏衆がつくった雨池
江戸期の書物に描かれた黒鋏 (『続保定記』1843 (天保14) 年 成田山仏教図書館蔵)
大野鍛冶が使った大槌と小槌◇

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] 水と火の職人 黒鋏衆と大野鍛冶

LIVE SCHEDULE

- 06 これからの催し
 - 企画展 雨と生きる住まい—環境を調整する日本の知恵
 - 企画展 壁のパブリックアート

LIVE REPORT

- 07 開催報告
 - 企画展 タイルが伝える物語—図像の謎解き 関連ワークショップ
タイルに描かれた物語の朗読会
 - テラコッタパーク 夏の夜のコンサート
- 08 企画展 手のひらの太陽—「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具 関連ワークショップ
こもれびを食べる動物になろう! / 自分の日時計をつくろう!
フォトコンテスト2014「私の好きなライブミュージアム」
入賞・入選作品の決定
- 09 夏休み特別企画
どろの遊園地2014~子どもは遊びの天才だ~
光るどろだんご大会2014 inセントレア

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.33 | 季刊 秋
2014

表紙写真

窯のある広場・資料館で出会った母子。浜松から知多半島へ、夏休み最後の思い出づくり。暗い窯の中に恐る恐る入ってみたり、大きな土管をくぐって遊んだり、元氣いっぱいの子供でした。

(2014.8.30)
撮影：加藤弘一

常滑から※
32

常滑の多賀神社

常滑市苅屋洞ノ脇にある多賀神社は旧苅屋村の氏神であったといわれ、その創建は元和7(1621)年に多賀大社から勧請されたと伝えられています。多賀といふ名前を持つ神社は日本各地にあり、その総本社は滋賀県の多賀大社です。この神社の周辺には、オガタマノキという樹木をはじめ、県の文化財に指定された社叢が広がっています。道路から石段を上がっていくと、玉砂利がきれいに掃き清められた境内が現れます。

木漏れ日の参道を進んでいくと、まず左手に拝殿が見えますが、その拝殿の左手前には祝詞殿と本殿があります。その本殿には伊弉諾尊が祀られています。うっそうと茂る高木に囲まれた空間の中に、桧皮葺の屋根を持ち、木組みが美しい木造のこれらの社殿がひっそり佇む姿は、小規模ながらも荘厳な雰囲気を出しています。夏の盛りには蝉しぐれがひと際高く響いていたと思われれます。

竹多 格 (主任学芸員)

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

赤穂の塩田も築いた知多半島の黒鋏衆

「黒鋏衆」とは、土木作業を行う人たちのこと。江戸時代には幕府や大名に仕える組織もあり、民間にも存在しました。農地が狭い知多半島では、農業だけで生活できなかつた農民が現金収入を得るため、農閑期に土木作業の出稼ぎに出ていたのが始まりでした。

やがて、体力だけでなく、彼らの持つ土木技術の評価が高まります。とくに水を制する「床しめ*」、農地を広げる「畝まし*」といった技術は有名になり、知多の黒鋏衆は、三河、美濃、伊勢をはじめとして西は畿内、東は遠州、相模まで出かけ、治水、新田開発、道路整備などに従事するようになりました。19世紀初めには、乙川村(半田市)の黒鋏衆が赤穂(兵庫県)で

塩浜の堤普請*を請け負ったという記録も残されています。

仕事の依頼があると、黒鋏衆は数人から数十人の集団で出かけました。近世職人史を研究する篠宮雄二さん(中部大学教授)は、「二つの決まった集団というより、土木技術を持った親方が依頼された仕事ごとに労働力を集めて出かける形だったと考えられます」と話します。

知多半島の黒鋏衆は、高度な土木技術をどうやって習得したのでしょうか。



黒鋏衆の作業着姿
(『有脇の黒鋏』有脇公民館発行)

黒鋏



黒鋏衆の
郡道工事の様子
(写真提供:知多市
歴史民俗博物館)

*床しめ/粘土質の「ハガネ土」を突き固め、粘りを出すことで水漏れを防ぐ技術。
*畝まし/山野から大きな畑をつくり、段々の畑や田をならして一枚の田畑につくりかえる技術。
*塩浜の堤普請/潮の干満を利用して海水を引き込む塩田の堤をつくる仕事。

「雨池」から得た高度な土木技術

降水量が少なく、大きな河川がない知多半島は、昔から水に苦労してきました。農業用の灌漑は、雨水が集まる谷を堰で堰き止めた「雨池」に頼っていました。江戸時代前期までに千以上の雨池が築かれました。

雨池をつくるためには、降った雨がどのように流れ、どこに溜まるか、地形を読まなくてはなりません。頑丈な堤を築くには、距離や水平を出す測量技術、水が漏れないようにする施工技術、石垣を組む技術なども必要でした。農民の中でそうした技術に秀でた者が、指導者的な立場になっていったのです。

「江戸中期以後も新田の開発などにより、水の需要は大きくなりました。それに対して、知多の黒鋏たちは、一つの雨池を上・中・下に分割して大きくしたり、既存の水利権を守りながら用水や排水路をより複雑化させて、新田に水を引きました。こうした試みが、彼らにより高い技術を習得させたといわれています」と、篠宮さん。知多半島の自然条件や水利権などの社会的な制約が、黒鋏たちの高い技術を育んだといえるでしょう。



黒鋏衆の道具◇
鋤簾(左)と
鶴はし(右)

「竹の根を切るのは豆腐を切るとき」

*『農具便利論』
1822(文政5)年刊
明治期になっても刊行
され続けた農業技術書
のベストセラー。広く
普及する価値があると
考えられる農具を紹介
している実用図鑑。



黒鋏が使う主な道具は、土を掘り起こす平鋏、鶴はし、土砂をすくう鋤簾の3種。知多半島の黒鋏衆が持つ平鋏は、とくに「黒鋏」と呼ばれる独特なもので、幕末の農学者・大蔵永常が著した『農具便利論*』でも紹介されています。

「大黒鋏」は刃先の幅が24cm、重さは2.25kgと、普通の鋏の約2倍の大きさで重さがあるとし、「尾張国知多郡よりこの鋏を使って土木工事に従事する人のことを黒鋏と呼ぶ」、その威力は「竹の根を切るには豆腐を切るとき」「池など新しく掘るときはほかの鋏の3挺分の働きをする」と書かれています。

江戸時代は、農民が鉄製の農具を持つようになり、生産力が飛躍的に増加した時代です。生産用の道具は、生産者が現場で身につけた知識や、こうあったらいいという工夫をすぐに形にしていこうとて発展してきました。黒鋏も、黒鋏衆の注文を反映して生まれたに違いありません。つくったのは、「大野鍛冶」と呼ばれる鍛冶職人でした。

「出鍛冶」が認められた特権的鍛冶職人

大野鍛冶
農鍛冶職の鑑札
固定的な組織を持たなかった黒鍛衆とちがって、大野鍛冶は仲間（同業者組合）を形成し、さまざまな決まりをつくらせていた。



江戸時代、知多郡大野谷（常滑市北部・知多市南部）を中心とする一帯には、多くの農鍛冶Ⅱ大野鍛冶が集まっていた。その背景には、大野湊が伊勢湾の港湾都市の一つとして繁栄していたこと、材料の鉄が入りやすかったことなどがあります。

大野鍛冶は、戦国期に伊勢から大野に渡ってきて大名の保護を受けたという由緒書（起源を記したもの）を持っています。そこには、「徳川家康の命令に従い駿府城築城に参加した」「家康から尾張藩内に限らず、他の地域に向いて鍛冶仕事を許された」と書かれています。

「その由緒ゆえに、尾張藩も『出鍛冶』を認めていた可能性があります。実際、大野鍛冶の活動範囲は尾張東部のほか、美濃の一部や三河のほぼ全域にわたっています」と、篠宮さん。つまり、他の地域の鍛冶屋は自宅で営業する「居職」であつたのに対し、大野鍛冶は「出職」が認められた特権的集団だったので。



大野鍛冶がつくった鋤と鍛



縁起物
毎年、仕事始めに大野鍛冶たちが金山彦命を祀ってつくった刀。

大野鍛冶の道具
金床・大槌・小槌



独自の技術で地域の農業を支える

大野鍛冶の多くは農業との兼業で、農閑期に「得意場」という他国の村の自分の縄張りに出かけました。そこには仕事場があり、道具も置いてありました。

しばしも休まず打つ槌の音と飛び散る火花―これが鍛冶屋の風景でした。「けんか」と鍛冶屋は一人じゃできぬ」と言われるように、親方と職人が息を合わせて、金床の上の真っ赤になった鉄を槌で打ちます。鉄の温度は1000度〜1200度。それ以下でも以上でも、でき上がった製品が割れやすくなります。火をいかに上手く扱うかが本領でした。

また、大野鍛冶は「湯先」という独自の技術を持っていました。高価な鋼を使わず、使い古した鍋などを利用して鉄の刃先の補修をするもので、鋼よりも耐久力があると喜ばれたそうです。出先のお客様さんの要求に応じて道具をつくり、大野鍛冶はその地域の農業を支えていたのです。



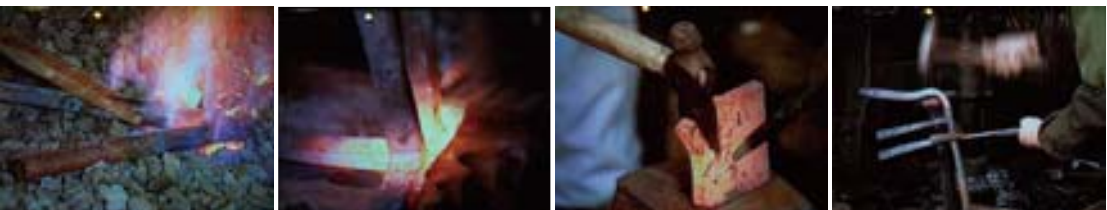
篠宮雄二さん
中部大学人文学部教授。専門分野は日本近世史。研究テーマに職人史、社会集団論、地域社会論など。

知多半島の風土が生み出した職人

海に囲まれた知多半島は、海運を通じて外部とつながっていました。日本中の新しいものや情報がいち早く入る地域です。人々は、旺盛な好奇心と探究心を持って経済活動を営んでいました。

「近世は農業が中心ですが、実はそれ以外の多様な産業があり、職人たちがいて、初めて成立する社会です。近世の縮図のように、それがいちばんよく見えるのが知多半島だと思います」と、篠宮さんは言います。

独特の技術を武器に、他国と関係を持ちながら知多半島で暮らしていた黒鍛衆と大野鍛冶。彼らもまた、風土が生み出したオリジナリティあふれる職人でした。



大野鍛冶の作業風景
平成になって大野鍛冶は姿を消した。（映像提供：愛知製鋼株式会社・鍛造技術の館）



常滑市西之口の神明社
鍛冶職人の信仰の対象となった金山彦命が祀られている。

撮影協力
◆印 愛知製鋼株式会社・鍛造技術の館
◇印 知多市歴史民俗博物館